

『六月の満月』（一雫ライオン）ができるまで

流星舎は2025年に創業した出版社です。創立記念刊行作品として、2026年3月25日に一雫ライオンさんの長編小説『六月の満月』を刊行しました。

流星舎として初めて刊行する書籍なので私にとっては特別な一冊ですし、「小説ってどうやって作ってんの？」と友人などから聞かれることも多かったのですが、記憶を辿って『六月の満月』ができるまでをまとめてみようと思います。

少し遡りますが、初めてライオンさんとお仕事をご一緒したのは『二人の嘘』という作品でした。刊行は2021年。ありがたいことにこの作品は何度か重版をかけることができ、次なる作品に向けて、ライオンさんと僕は気合いを入れていました。

でも、そこでまさかの出来事が.....。

（流星舎 有馬大樹）



『六月の満月』ができるまで

流星舎刊 税込1870円

『六月の満月』（一雫ライオン）ができるまで① (2021年)

2021年、ライオンさんにとって初めての単行本となる長編小説『二人の嘘』を担当しました。この作品はありがたいことに何回か重版をかけることができ、映像化のお問い合わせも複数いただきました（編集者にとって嬉しいことの一つに「重版の連絡」というのがあります。何回もできると、かなり嬉しい）。初めてライオンさんと一緒に仕事をすることで結果を出せたので、もちろん「次作はどうします？」となります。これは作家によって色々なやり方があると思うのですが、ライオンさんは比較的短いプロットを用意してくださって、「こういうのを書こうかなと思っている」とプレゼンしてくれるタイプ。ライオンさんとは妙にウマがあったというか、時に軽口も叩く関係になれていたのですが、新しい作品の話をする時は、私も体のどこかが緊張している状態になります。

「六月の満月ってタイトル、どうですかね？」

A4の紙に書かれた短めのあらすじ。それに僕が目を通したその瞬間、待ちきれずといった感じでライオンさんが呟きました。私はまだあらすじをしっかりと読めてはいなかったのですが、何となくその音の響きに惹かれるものがあり、「いいタイトルですねえ」と答えた記憶があります。実は『二人の嘘』はプロット段階では違うタイトルでした。ゲラのやり取りをしている時に帯コピーを考えて、それを見せる際に思い切ってタイトルを『二人の嘘』に変えてライオンさんにご提案したのですが、『六月の満月』に関しては「このタイトルで最後までいくんだらうな」とぼんやり思ったように記憶しています。

『六月の満月』のあらすじには、こう書かれていました。「光の方向へいこうとする三人が、運と因果に引きずられる物語」。ここで僕が聞いたのは、「運と因果に引きずられた三人は、それでもなお光の方向に向かうんですか？ それとも闇の方向に向かってしまうんですか？」ということでした。これに対するライオンさんの回答が私にはすごい印象的だったのですが、それは作品のキモでもあるので、ここでは伏せさせていただきます。

その他、細かい点でもいくつか話をしました。たとえば、

- ・登場人物は何歳くらいのイメージですか？
- ・物語の時代設定はいつですか？
- ・主人公がある行動を取るとされていますが、その動機は一体なんですか？
- ・主要登場人物の男と女をどういう風にして出会わせるんですか？

などなど。30代前半の男と20代後半の女が主要登場人物で、時代設定は2024年とか2025年とかそのあたり、そこにもう一人の登場人物が現れて.....というふうに、物語の設定と世界観を共有していきます。具体的なことだけでなく、「なんでライオンさんはこの物語を書こうと思ったんですか？」みたいな抽象的なことも聞いたりしました。

その段階ではライオンさんも細かい点に関して明確なイメージがあるわけではありません。また、その時点でイメージした設定はその後変わる可能性もあります。ただ、作家が「こういうのを書こうかなと思っている」と言ってプロットを見せてくれたり語ってくれたりした際に、私が何となく意識しているのは「質問すること」かもしれません。質問に対する「答え」がなくても全然構わなくて、質問することで書き手の中で物語が膨らんだらこれ幸い、みたいな意識。そんなこんなのやり取りをする場所は、時に喫茶店だったり、時に居酒屋だったり。歩きながら何となく話すということだってありますし、ライオンさんから「こないだのプロットなんですけど」と言って新しくしたものを見せてくれることもあれば、私の方から話題にすることもあります。

当時ライオンさんは、『流氷の果て』という作品に取り掛かっていたので、その進捗状況を聞きながら、「いつから書き始めるか」を何となく話していきました。そんなふうにして、新作の話を進めていたある日、思ってもみなかったことが起きてしまったのです。



『六月の満月』の初校ゲラとライオンさん

『六月の満月』（一雫ライオン）ができるまで② （2022年1月下旬～2月初旬）

「すいません、ちょっとまずいことになっちゃって」

ある日の夜、ライオンさんからかかってきた電話。「もしもし」のあと、いきなりこう言われました。結構寒い夜で、ビルの中に入って電話を受けた記憶があります。手帳をひっくり返してみましたが、2022年1月下旬のある日のことでした。手帳には走り書きで「ライオ」と書いてあります。この走り書きに記憶はないのですが、僕も動揺したのでしょうか。だって、こう言われたのですから。

「もしかしたら、俺、ガンかもしれなくて」

ライオンさんはひどい頭痛に苦しんでいました。それは私も同じだったので、「頭痛ってつらいですよ」なんて言い合ってもいました。でも、私のは単なる偏頭痛でしたが、ライオンさんのそれはガンに起因する痛みだったのです。数日後、検査結果が出たライオンさんから改めて電話。

「上咽頭がん」

「ステージ4」

「転移あり」

そういう単語だけが妙に強く刻まれました。『二人の嘘』の取材のために金沢に行った時も頭が痛かったこと。その後、『流氷の果て』の取材のために知床に行った時も頭痛はおさまってはいなかったこと。このご連絡をいただいた10日ほど前にとある会食があって私も同席したのですが、その会食の時も体調が悪く、でも「ここを乗り切ろう」との思いで我慢していたこと。そんなことを話したライオンさんが呟くように言いました。

「六月の満月、遅れちゃうかもです。せっかく良い物語を考えたのに」

私はその時「それよりもまずはガンと戦いましょう」というようなことを言ったと思うのですが、実は「すごいな」と思ってもいたのです。ガンのステージ4、転移あり、このままだと数ヶ月で死ぬと医者に言われたその日に、「せっかく良い物語を考えたのに」と言えるなんて、と。作家の中に生まれた物語はそれくらい強い存在感を放つのか、と。そして、ライオンさんがそれほど「良い物語」という小説なら、編集者としてそれを担当したいとも思いました。そのためには、ライオンさんにガンと戦ってもらわないといけません（私が言わなくてもわかっていると思うのですが）。

「ガンをやっつけて、今書いてる『流氷の果て』を書き上げます。そしたら有馬さん、『六月の満月』やりましょう」

『六月の満月』（一雫ライオン）ができるまで③ （2022年2月中旬～3月上旬）

2022年は本当だったら『六月の満月』執筆スタートの年になるはずでした。ところが、ライオンさんが上咽頭ガンを患っていることが発覚し、病魔と戦うことに。

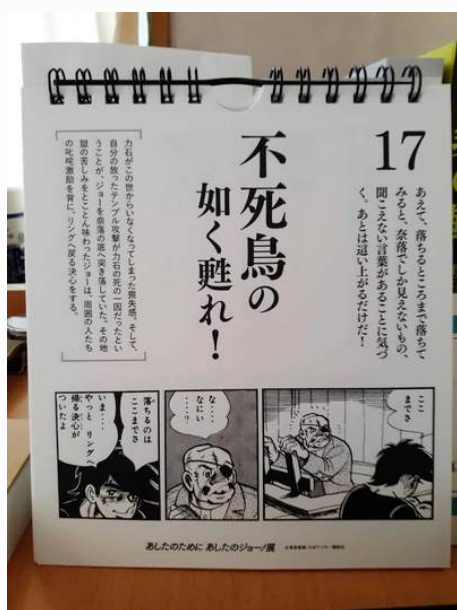
私は以前、恩人がガンにかかった際に帝釈天に行って病氣平癒のお守りを渡したことがあります。その方が今でも元気に過ごしていらっしゃることにあやかって、「ライオンさんも」との思いで帝釈天に行きました。そして、僕が使っていた「あしたのジョー」の日めくりカレンダーと一緒にライオンさんに病氣平癒のお守りを渡しました。もっとやるべきことやできることはあったかもしれないけど、ライオンさんと私の関係を考えて、それくらいの方が応援になるかな、と。ベタベタした関係を好きな人ではないので、「待ってますからね」と思いがしっかり伝わればそれでいいと考えていました。

2月中旬、ライオンさんは抗がん剤治療（1クール目）のため7日間入院しました。全6クルールの抗がん剤治療を行う予定で、それぞれのクールにつき最低1週間入院することになっていたそうです。基本的に連絡は遠慮しようと思っていたのですが、『二人の嘘』のことで連絡することもいくつかあり、その都度ライオンさんからも返信をいただきました。短い文章とともにこんな写真も。



娘さんと息子さんからのメッセージに思わず涙ぐんだりもしました。「あしたのジョー」の日めくりカレンダーも置いてくださっていて、「渡してよかった」と思ったり。

おそらく僕に気を使っただことだったと思うのですが、ライオンさんの返信は短いながらも前向きなものが多かったように記憶しています。また、2022年の手帳を見返すとメモ欄のところに「『六月の満月』のこと」と書いている日がありました。おそらくライオンさんと『六月の満月』のやり取りをしていたのだと思います。でも、後に聞いたところによると、やはりこの時期はまだ痛みも強かったとのこと。また、入院中は24時間点滴に繋がれた状態で、抗がん剤や利尿剤など様々な薬を投与していたということも後々ライオンさんから聞きました。そんな時期に返信をもらっていたことに感謝するとともに、不勉強な自分を反省しました。



2022年3月上旬。手帳には、1クール目の抗がん剤治療を終えて退院したライオンさんと会う時間と場所が記されています。私は手帳を見返して後日書き込みをすることが多いのですが、手帳のその日の欄には「ライオンさんを励ますことはできただろうか」と書いてあります。この日も『六月の満月』のことや、その時期にライオンさんが取り掛かっていた『流氷の果て』の話をしたのだと思うのですが、僕はどこかで気もそぞろでした。会うなりライオンさんにこう言われたからです。

「やっぱ抗がん剤の影響で、髪、抜けちゃいましたよ」

かぶっていたニット帽を取ったライオンさんを見て、ライオンさんが何と戦っているのかを改めて思い知らされました。僕がショックを受けるのは、戦っているライオンさんに失礼です。でも、どこかで「ライオンさんは大丈夫」と思っていた僕は、髪の毛が抜けたライオンを見て、やっぱりショックを受けてしまったのだと思います。そんな自分への不甲斐なさゆえか、「ライオンさんを励ますことはできただろうか」なんてことをメモってしまったんだと今にして思います。

『六月の満月』（一雫ライオン）ができるまで④ (2022年4月以降)

ライオンさんが予定していた抗がん剤治療は全6クール。前回書いたように、それぞれのクールにつき、最低1週間入院することになっていました。

ところが、3クール目の治療の際、ライオンさんにアレルギー反応が出てしまい、抗がん剤治療は中止になりました。その後、ライオンさんは全35回の放射線治療を受けることに。4月下旬から6月上旬まで、平日は毎日治療のため病院に行っていました。

そうやってライオンさんは病気と戦っていたのですが、少しずつ作品のことも考えるようにしていたそうです。本来であれば執筆に取りかかっていたはずの『流氷の果て』、そしてその後にご一緒しようと約束していた『六月の満月』。この時期はとにかく治療優先と思っていたので、私からは作品に関しての話をそれほどしていなかったのですが、ライオンさんの頭の中で物語は膨らんでいたのかもしれない。

ライオンさんが放射線治療を終えたあと、僕はライオンさんを野球観戦にお誘いしました。ライオンさんは大の野球好き。当時、千葉ロッテマリーンズに在籍していた佐々木郎希選手が完全試合を達成して話題になっていたので、「話題の佐々木を観に行きましょう」と。病気と戦っていらっしゃるライオンさんに対して、野球観戦のお誘いもどうかと思うのですが、少しでも気晴らしになればとの思いでした。

ライオンさんが「ぜひ行きましょう」とおっしゃってくれたので、佐々木郎希選手が投げる日を僕なりに考えてチケットを取ったのですが、なんと肝心の佐々木選手は投げず……。それでもライオンさんは野球を楽しんでくださったので良かったのですが、彼が投げないことがわかった時はさすがに焦りました。

試合が終わって「軽く飯でも食いますか」となってお店に入ったのですが、実は当時のライオンさんは治療の影響で味覚がない状態。そのこともあり私はどうしても体のことを気遣ってしまうのですが、ライオンさんはどちらかという作家モードだったと記憶しています。いよいよ執筆に取り組み始めた『流氷の果て』のこと、そして『六月の満月』のこと。ライオンさんは作品を執筆する際、簡単なプロットをご用意してくださると第一回目で書きましたが、決してプロット至上主義ではありません。どちらかという、「書きたい人間がいること」が大事なタイプなのではないかなと思っています。登場人物をより魅力的に見せるためであれば、最初に考えていたプロットから逸脱することをいとわないと言いますか。もちろん、大枠での物語の骨格を変えることはそうそうないのだと思いますが、「こういうのはどうですかね?」「こういう時にこういう行動を取るとこの登場人物の見え方ってどう変わりますか?」とか、次々と質問されました。

ライオンさんの体のことはもちろん心配。でも、ライオンさんと作品の話をする時間は僕にとっても貴重でしたし、何より楽しかった。私が「こういうふうにするのはどうですか？」と提案すると、ライオンさんはその案を真剣に考えてくれるのです。人生経験も豊富な方なので、人物描写が頭でっかちじゃないというか、深みがあるとも思いました。僕のアイデアが採用されることもあればされないこともあるけど、作品に深く関わっている喜びを感じさせてくれる作家だなあという思いは日増しに強まり、私は一瞬ライオンという作家にどんどん惚れ込んでいったのです。



ZOZOマリスタジアムにて

『六月の満月』（一雫ライオン）ができるまで⑤ (2023年～2024年初頭)

作家が他社の作品書いている時、編集者は何をしているのか。先日、友人にそんな感じのことを聞かれました。僕に関して言うと、特別なことは何もしてないような気がします（偉そうに書くほどのことではないですが）。でも、ライオンさんにはよく電話していました。

ライオンさんが2023年に取り組んでいた『流氷の果て』は講談社刊行作品です。ライオンさんは、「いま取り組んでいる作品」に思考エネルギーの大半を費やす方なので、『流氷の果て』に対して本格的な執筆モードになってからは、基本的には『六月の満月』の話はしていなかったと思います。

そこで、電話です。ライオンさんは電話を嫌がる人ではないので、それに甘えてよく電話していました。「この時間は執筆時間じゃないな」とか「このニュースのことはライオンさんも気になってるだろうな」とか、そんなことを考えたり見つけたりしながら、「もしもしー」と。『二人の嘘』絡みでの連絡もあったので、仕事での連絡もあるにはあるのですが、共通の趣味である野球の話だったり、他愛もないことでもちょこちょこ連絡していたように記憶しています。

その際、もちろん「『流氷の果て』はどうですか？」とか「体の調子はどうですか？」という話もします。結果として、このやり取りの積み重ねが良かったように思います。「ライオンさんは作品のそういうところを気にするのか」とか「元気そうに見えるけど、こういうところには今後注意しよう」とか、会話の中で色々な発見があるからです。

『二人の嘘』の執筆期間より、2023年のほうがライオンさんに連絡する回数は多かったと思います。逆に、僕が『流氷の果て』の担当編集者だったらそんなに電話しなかったかもしれません。担当編集者からの電話自体が原稿催促にもなりかねず、ライオンさんを変に苦しめてしまう可能性もあるから（イライラさせてしまう可能性もあるし）。連絡しなすぎるのも問題なので、こころの塩梅はいつも難しい。

この時期の連絡で、僕から『六月の満月』のことを話すことはほとんどありませんでしたが、ライオンさんは作品アイデアが頭に浮かぶと嬉しそうに話してくれることがあります。毎回というわけではありませんが、何らかの電話で話した流れで『六月の満月』の話になり、「こんなふうにしようと思ってるんですね」などと話してくださることは何回かあって、「めっちゃ面白そうじゃないですか」とか「切なすぎる!」とか、特に編集者らしいとは言えないリアクションだけで「待ってますからね」アピールをしていた感じでした。

苦しみながらも『流氷の果て』を書き続けるライオンさん。つまり、『六月の満月』の執筆スタートの時期が迫ってきていました。僕はライオンさんにあることを告げなくてはいけなくて、何となく気もそぞろでした。

流星舎を立ち上げようと考えていたのです。そのことをライオンさんに話したのは2024年3月のことでした。場所は三軒茶屋。三茶で話すことになったのは偶然にすぎないのですが、自分が生まれ育った街でもあったので、何となく感慨深いものがありました。そして、妙に緊張もしていました。



『二人の嘘』で書店回りした時のライオンさん

『六月の満月』（一雫ライオン）ができるまで⑥ (2024年3月)

三軒茶屋に「セブン」という喫茶店があります。僕が子供の頃には既にあったはずで、いわゆる純喫茶っぽい雰囲気のところ。高校生の時、入ってみたくて店の前まで行ったけど、緊張して入れなかった記憶もあります。

その「セブン」で、ライオンさんと会ったのは2024年3月のことでした。

その日、ライオンさんは三茶で会食と言っていて、それを知っていた僕は夕方くらいに電話。「今日、会食ですよ？ 何時からですか？」と。ライオンさんは会食の時、遅れてくることはまずありません。なんなら、編集者より先に店に着いていることも多い。ここらへんは「時間に正確」というのはもちろんのこと、人生経験から導き出したたかな行動原理でもあると僕はニラんでいるのですが、その日もやっぱりライオンさんは早め早めの行動をしていらっしゃいました。

会食が始まる前の数十分をいただきました。その場所が「セブン」だったのです。おそらくライオンさんも「なんだ？」と思ったことでしょう。でも、僕が話そうと思っていることは予想できなかつたらうと思います。

余談ですが、会う場所が三軒茶屋で、しかもスタバでもコメダでもホシノでもなくセブンであったことは、流星舎始まりのエピソードとして、ひそかに気に入っています。ライオンさんも「セブン」は思い出深い場所だったそうで、そんな場所で人生の決断を伝えることができたのですから。思春期の僕が緊張して入れなかった「セブン」。そして、脚本家時代のライオンさんが大事な打ち合わせをしていた場所でもある「セブン」。

その「セブン」で、僕はライオンさんに2つのことを告げるつもりでした。一つは、「学生アルバイトの時代から23年間お世話になった幻冬舎を辞めて、流星舎という出版社を作ろうと考えていること」。そしてもう一つは、「流星舎刊行第一弾はライオンさんの作品にしたいと思っていること」。

新しい出版社の社名は「流星舎」にしたいという考えはこの時点で既にありました。僕には、自分を編集者として育ててくれたと感謝している恩人がいます。白川道という作家と、幻冬舎です。白川さんは「無頼派」なんて呼ばれてもいた小説家で、彼のデビュー作が『流星たちの宴』。白川さん絡みの「流星」と、幻冬舎の「舎」の字を取って、「流星舎」。それが許されるかどうかはともかくとして、「この社名にしたい」という自分自身の考えはライオンさんにも伝えました。

出版社をやっとうまくいく保証なんてありません。むしろ厳しい見方をする方が自然です。なので、上記2つをライオンさんに告げてどういう答えが返ってくるかを考えると怖くもありませんが、「セブン」の奥の方のテーブルに通されて、いざ告白。「ライオンさん、実は……」みたいな、珍しく真面目な口調で。驚くライオンさんに、「どこかに転職するという事ではないんです」と。そして、「ライオンさんの作品を流星舎の刊行第一弾にしたいんです」と話したら……ライオンさんはニヤリと笑って、

「そんなの、やるに決まってるじゃないですか。むしろ光栄ですよ」

即答。あれはしびれたなあ。「ああ、この人は絶対に裏切れないな」と思いました。「今日帰ったら奥様と相談してください」というようなことは言いましたが、とにかく嬉しかった。その日はそれほど時間がなかったので、色々な人に不義理をしないようにあれやらこれやらを決めたり考えたりしないといけないね、ということだけ話して、僕は会食に向かうライオンさんを見送ったのでした。

『六月の満月』のことはあまり書けなかったけど、執筆前夜の1つのエピソードとして。



この一冊が全ての始まりでした

『六月の満月』（一雫ライオン）ができるまで⑦ (2024年4月以降)

今回は、作家にとってひとつの作品がどれくらい大きな存在であるか、という話。

流星舎という出版社を立ち上げるつもりであることをライオンさんに伝えた話は前回書きましたが、その時期のライオンさんは『流水の果て』の改稿に取り組むタイミングでした。他社作品なのででしゃばったことをするつもりはありませんでしたが、『六月の満月』のこともあるのでライオンさんとやり取りする機会も多く、会ったり電話したりするたびに、『流水の果て』に関する話をよく聞いていました。

率直に言うと、ライオンさんは苦しんでいるように見えました。しかもその苦しみは日増しに大きくなっているように見えました。「どうですか？」と聞けば、「ここをこういうふうにしようと思っている」と具体的な直しのポイントをおっしゃるのですが、なんとなく隘路にはまり込んでいるというか、袋小路に迷い込んでしまったように見えるというか。『流水の果て』のことを考えすぎていて、ちょっと煮詰まっているように思えたのです。

こうなると、次作の話はできません。僕は本音では『六月の満月』の話がしたい。でも、ライオンさんの真ん中には『流水の果て』がどかんと居座った状態。さてどうしようかなと思った私は、ライオンさんを食事に誘いました。

「気晴らしに飯でも食いにいきませんか？」

と。淡島通りにあるお店でライオンさんと会ったのですが、驚いたのが飲むスピード。僕がまだ一杯目のビールを半分も飲んでいないのに、ライオンさんは焼酎のロックを次々頼むのです。その日は作品の打ち合わせではないので、酔うのはかまいません。でも、体のこともあるし、何かライオンさんのメンタルが不安定に思えて、だいぶ心配になりました。そんな状態のライオンさんが何を話すか。ひたすら『流水の果て』のことです。

意見を求められれば僕も話すのですが、そんな僕の話が終わらないうちにライオンさんがまた話し始める。「最後まで聞いてくださいよー」と言っても、ライオンさんは「すみません（笑）」と言いつつ話し続ける。しかも、「迷い」を感じさせる発言が多い。僕に話すというよりも、自分で自分と話している感じ。そして、次々とお酒を頼む。

こりゃ、まずいな。

基本的にライオンさんは聞き上手な人です。自分の話をするのももちろんあるけど、こんな姿を見たことはそれまでありませんでした。しかも、「どう直すか」に関して迷いがあるように見える。僕はお店を出たあと、ライオンさんに時間をもらって言いました。

「ライオンさん、自分では大丈夫と思ってるかもしれないけど、相当メンタルやばいと思います」

そして、「このままだと『流氷の果て』は終わらないと思う」「読者の心に何を残すかをもう一度考えてから、どう直すかを考えた方がいい」というようなことを伝えました。他社作品に対してここまででしゃばったことをするのは嫌なんだけど、その日のライオンさんを見たら、言わずにはいられませんでした。

その日は、その一件で終わりにして帰宅。翌日だったかその次の日だったか、ライオンさんから「有馬さんに言われるまで自分の状態に気づけてなかった。冷静になれたし、楽になれた」と言われて、僕も安堵しました。その後も『流氷の果て』の改稿にライオンさんは苦しんでいましたが、結果として素晴らしい作品に仕上げたのですから、さすがだな、と思った次第です。

ちなみに、『流氷の果て』だけを考えているように見えたライオンさんですが、この時期に『六月の満月』のことも考えていて、構想メモを溜めていたとのこと。ありがたい&恥ずかしい話ですが、僕は全然気づいてませんでした。



焼酎をよく飲む

『六月の満月』（一雫ライオン）ができるまで⑧ (2024年10月くらい～2025年1月上旬)

今回は、いよいよライオンさんが『六月の満月』を書き始めた時の話。

『六月の満月』は、『二人の嘘』に次いで2回目となるライオンさんとの仕事。『二人の嘘』の時は、ライオンさんが用意してくれたプロットの中から、とあるタイトルで2～3行書いてあったのが気になって、「なんですかこれ？」と言ったところから作品が生まれました。「ある男が、ある女性と金沢に逃避行する」とかそんな感じの、プロットというよりメモみたいな。「これはプロットとも言えないものなのですが」と言って語り始めたライオンさんの含羞を帯びた表情を見て、「これにしましょうよ」と言った記憶がありますが、今でもなぜそれを選んだのかうまく説明はできません。完全に「なんとなく」です。ちなみに、『二人の嘘』はその後の打ち合わせでメモの内容から変わっていきましたが、それでもあのメモが全ての始まりだったのは間違いありません。

『六月の満月』では、ライオンさんがA4の紙に短めのあらすじを書いてくださったと第一回目に書きました。そのプロットを踏まえて改めて打ち合わせをした場所は渋谷のセルリアンホテル。時期は2024年10月くらいです。『二人の嘘』の時も、大事な打ち合わせの時はセルリアンホテルのロビーカフェでした。これも理由は「なんとなく」です。せっかく色気のある物語を書くんだから、ちょっと背伸びしましょう、みたいな感じですよ。ライオンさんも僕も普段はイタリアンより焼き鳥がいいみたいな人間なのですが、作品の打ち合わせでセルリアンに行く時はしっかりジャケットも着て、「作家と編集者」っぽい感じでのぞみます。

ライオンさんのプロットに書かれていた『六月の満月』というタイトル。そして、「光の方向へいこうとする三人が、運と因果に引きずられる物語」という一文。僕は、またまた「なんとなく」ですが、このタイトルとこの一行で十分なんじゃないか、と思いました。そもそも「2～3行のメモ」から『二人の嘘』を生み出したライオンさんと僕なんだから、これだけあれば十分じゃない？と。

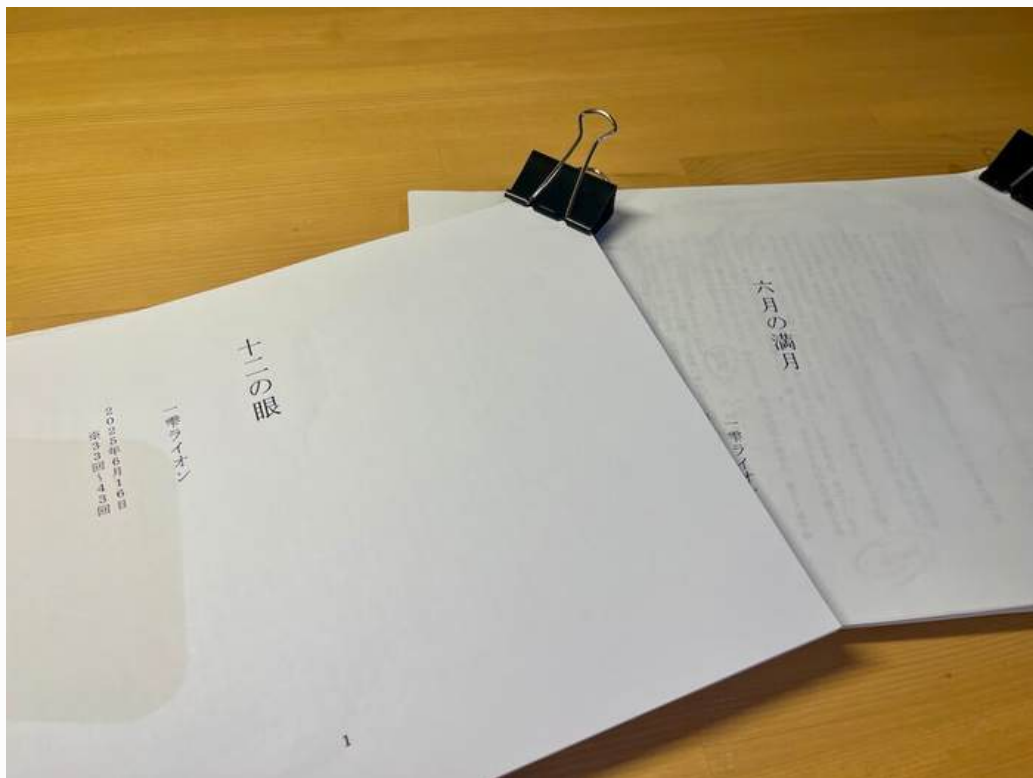
この「なんとなく」は僕の場合、だいたい良い方向に転びます。『六月の満月』もライオンさんらしい泣ける小説に仕上がりにつつあるので、良い方向に転がっていると信じています。ただ、良い方向に向かうためには試練もつきもの。

いざ執筆に取りかかったライオンさん。タイトルに「六月」と入れている以上、6月に出しましょうとこの時点では話していて、刊行時期の目標は2025年6月にしました。ライオンさんは「3ヶ月で書きます」と豪語。僕は「それはさすがにキツくないですか？」と一応の気遣いを見せつつ、なんか自信ありな表情だったし、『二人の嘘』よりは短い物語になる想定だったので、「もろもろの準備を考えて、2025年1月末に脱稿してほしい」とお願いしました。ライオンさんは二つ返事で「わかりました」と。今振り返って思うことですが、僕は「前回うまくいったから、今回も」と考えてしまっていたのだと思います。初めての仕事の時の緊張感に比べると、どこかが緩んでいたのかもしれない。

その後、何かの折にライオンさんに電話するたびに聞くともなく執筆状況を聞くようにしていたのですが、どうも予定より遅れているっぽい。というより、『六月の満月』の話避けようとしているようにも思える。小さくなものではあったけど、結構はっきりと嫌な予感がしました。でもライオンさんはがんばって書いてくれている。3ヶ月で書くと言った時の表情も覚えている。完成原稿で僕を驚かせたいという思いがあるのかもしれないな、と思って、踏み込みたいけど踏み込めない日々が続きました。信じて待つ、その一心でした。それがライオンさんへの信頼ではなく、むしろ甘えであることに僕は気づいていませんでした。

そして。

2025年が始まったばかりの1月のある日、「全体を10としたら、どのくらいまで進めますか？」と思い切って聞いたところ、半分も進んでいないことがわかりました。締切の約束はその月の末日。「展開は頭の中にある。間に合わせる」とライオンさん。こういう時、編集者はどうするか。それこそ「みなさんどうしてるんですか？」と教えてほしいですが、ライオンさんと僕がどうしたかはまた次回。



『六月の満月』執筆と同時期に連載していた『十二の眼』

『六月の満月』（一雫ライオン）ができるまで⑨ (2025年1月中旬～2月)

『六月の満月』は2025年1月末に原稿をいただく予定で進めていました。なのに、1月上旬に「全体を10としたら、まだ半分にも達していないこと」が発覚。ライオンさんは「展開は頭の中にある。月末までに間に合わせる」とのこと。

普通に考えて、1月末に間に合わせるのは無理です。もっと早くに「どれくらい進んでいるのか」を聞いておくべきでした。ライオンさんが「間に合わせる」とおっしゃってくれたのは、「流星舎として最初の刊行作品になるから」という思いがあったからだと思うのですが、それを優先した結果として作品からライオンさんらしさが抜け落ちたら意味がありません。ライオンさんを信じて待つ、という態度を取り続けたのは、編集者としての怠慢だったと今は反省しています。

「ライオンさん、メ切を遅らせましょう」

編集者としては「何とか間に合わせてください」というべきかもしれませんが、僕はそう提案しました。スケジュール的に無理だと思ったというのもあるのですが、電話の向こうのライオンさんの様子から「メ切を後ろに倒す」が最善と判断したからです。ただ、その判断は別の意味でリスクを伴いました。実はこの時期、もう一つの長編小説の連載（『十二の眼』／2026年秋冬に流星舎より刊行予定）がほぼ決まりかけていて、その作品のことも考えなくてはいけなかったのです。ライオンさんの2025年は「『流氷の果て』刊行、長編2作と短編1作の執筆」という予定になっていて、長編2作と短編1作は僕が原稿をいただくことになっていました。ライオンさんの体のことを考えると負荷をかけすぎかもしれません。でも、ライオンさんは

「僕の体のことはそんな気にしないでいい。どんどん書きたい」

とおっしゃっていました。小説家としてのキャリアで言えばまだルーキーとも言えるライオンさんにとって、2025年は大きなチャレンジの年でした。2024年の段階では「来年は働かないといけませんね」なんて軽口を叩いていたのですが、2025年に入るやいなや、ライオンさんも僕も余裕がなくなっていったように思います（その証拠に、大好きな野球の話のあんまりしなかったし、会ってお酒を飲みながら話す機会も減りました。そのかわり、毎日のように電話していました）。

ここはもう遠慮している段階ではないと思った僕は、「『六月の満月』は実際どんな感じなんですか？ 僕がお手伝いできることはありますか？」とそれまで聞くに聞けなかったことを聞いてみました。ライオンさんの話を聞いた僕の感想は、「予定よりだいぶ遅れるかもな」というものでした。ライオンさんがどこか苦しそうなのです。『流氷の果て』から休みなく『六月の満月』に取り組んだことで、メンタル的にも準備の面でも余裕がなさすぎました。「苦戦してるんだな」と思いはしたのですが、長編連載のことを考えると無制限にメ切を伸ばすことはできません。『六月の満月』のメ切を2月20日にすることにしました。

「仮に書き終えていなかったとしても、その時点で書けているところまで僕に送ってください」

僕はライオンさんにそうお願いしました。『二人の嘘』は脱稿してから原稿をいただきました。『六月の満月』もそのつもりでした。でも、そうならないかもしれない。執筆という領域に関して、編集者ができることはそれほど多くありません。ただ、この時は「途中でもいいから、とにかく原稿をいただく」という形で状況を動かそうと思ったのです。2月20日にメ切を設定したのは完全に僕の希望。流星舎を法人登記する日をその日にしようと思っていたのです。「会社を登記した日にライオンさんから『六月の満月』の原稿をいただく」ということを夢想しました。

2月20日。ライオンさんは『六月の満月』を脱稿することができませんでした。でも、途中までの原稿を送ってくれました。思い描いた形ではなかったけど、ライオンさんと取り組む新作です。気合いを入れて読み始めた僕は、「……こりやまずいな」とまたまた思う羽目になったのです。一難去って（去ってないけど）、また一難。

切なくて温かい純愛ミステリーの傑作!

六月の満月

一雫ライオン 1870円(税込)

感涙のラストまで一気に読み!

罪を背負った男と生きることが罰になった女。
二人の前に謎めいた青年が現れた時、
静かな日常は思いもよらぬ方向に転がり始める。
誰かを愛するとは、これほど胸を打つものなのか。
心揺さぶる読後感が話題の長編小説。

流星舎
創立記念
書き下ろし頭
長編

イラスト agoera

発行：流星舎 発売：幻冬舎 | <https://www.ryuseisha.jp>

デザインとか全くできなかったけど、何か作りたいと思って作った宣伝画像

『六月の満月』（一雫ライオン）ができるまで⑩ （2025年2月下旬～6月初旬）

今回は、ライオンさんが『六月の満月』の初稿をどう修正したか、の話。

結論から書きますが、僕はライオンさんから修正原稿をいただいた時、「.....すごいな」と感動しました。初稿をいただいて「まずいな」と思った僕は、ライオンさんと打ち合わせ。そこで「こういうふうにはどうか」という提案をしたのですが、結構思い切った修正依頼だったのです。なので、最悪のパターンとして「『六月の満月』の修正を一旦諦めて、正式に決まった長編連載『十二の眼』の執筆に取り掛かっていただく」という形も考えていました。

結構高い壁だったと思いますが、ライオンさんは乗り越えたのです（しかも『十二の眼』の最初の原稿もめちゃくちゃ面白かった）。

ライオンさんが『六月の満月』を脱稿したのは2025年4月3日でした。2月下旬に途中までの原稿をいただき、ちょこちょこやり取りしながら書き上げてもらった形です。今となってはライオンさんとも笑って話せるようになりましたが、初稿の原稿では物語が全然躍動していませんでした。『二人の嘘』でも『流氷の果て』でも、見事な描写力で物語に彩りを与えていたライオンさんの筆が.....硬いというか何というか。せっかく魅力的な登場人物を生み出したのに、その魅力を発揮しきれていない点も気になりました。

ライオンさんと打ち合わせしたのは2025年4月20日。僕はいただいた原稿に修正のお願いをするとき、（あれば、ですけど）「大きな3つ」を用意します。その他の細かい点をまとめた紙も持っています。話をややこしくしないためにも「3つ」に絞ることにしていて、ライオンさんとの打ち合わせでもそうしました。

詳しく書くことはできないのですが、

④主要等人物のキャラ設定を変える

※ライオンさんと『六月の満月』のやり取りをする中で彼が語った登場人物は、実に魅力的でした。その魅力を発揮するにはこういう人物造形にした方がいいのでは？ という提案です。

②物語全体と主人公の過去に深みを持たせるため、ある人物の描き方を修正する

※この人物に引っ張られすぎると物語の焦点がぼやけると思い、その人物の存在感を薄めるための提案しました。

③後半に出てくるある台詞を物語の中盤に持ってくる

※そうすることで物語を早く動かすことができる、そして物語が動いてからの展開を濃厚にできると考えて提案しました。

この3つに関して、セルリアンホテルのロビーカフェで3時間くらい話したでしょうか。「だったらお前が書けよ」と言われてもおかしくないくらい無理めなお願いだと自分でも思っていたのですが、ライオンさんは一つ一つに対して「だったら、こうするのはどうですか？」とどんどんアイデアを出してくれました。たとえばですが、①に関して「思い切って口調も変えちゃった方がいいですかね？ その方が読んだ人にもわかりやすいですか」とか、②に関して「この際、この人物を登場させるのはやめちゃいましょう。代わりにこういう人物を出すのはどうですか」とか。

「もっと僕自身が、この小説に出てくる人間を好きにならないといけませんね」

とおっしゃったライオンさんの台詞が強く印象に残っています。前回も書きましたが、流星舎創立記念作品であることへのプレッシャー、そして『流氷の果て』から休みなく『六月の満月』に取り掛かったことによる準備面での不安。その二つがライオンさんを苦しめた結果、一零ライオン作品の大きな魅力の一つである抒情性を出しきれていない原稿になってしまったのかもしれませんが。ここに関しては僕にも流星舎を始めることへの不安と焦りがあったので反省です。

これは後日「有馬さんにああ言われてハッとした」とおっしゃってもらったのですが、この時僕はライオンさんにこう言ったそうです。

「ライオンさんはエンターテインメント作家なんだから、読者を楽しませることだけ考えてください」

言った記憶はうっすらとありますが、そこまで重い意味を込めて言ったことではありませんでした。僕の中ではそれよりももっと緊張しながらライオンさんにぶつけた提案だったの方が記憶に残っているのですが、どういう言葉がどういう角度で入っていかかってわからないもんだなあ、と思います。

修正原稿をいただいたとき、「登場人物がすごく魅力的になった」と素直に思いました。「こんなに変わる？」と驚いてしまうくらいで、人に魅力があるので続きが気になる原稿になっていたのです。

初稿から再稿にかけてぐっと魅力を増した『六月の満月』。ただ、この時点では「展開の整合性は考えなくていい」と話していたので、ストーリー展開にはまだ課題がありました。ライオンさんはこの後、その修正に本腰を入れて取り組んでいったのです。



流星舎のロゴ。20代のアルバイト時代に初めて作った本のデザインを担当してくれたデザイナーさんが作ってくれました。このロゴを初めて見せたのもライオンさんで、ライオンさんの奥様が「いい！」と言ってくださったので、これに決めました。

『六月の満月』（一雫ライオン）ができるまで⑪ （2025年6月上旬～8月上旬）

『六月の満月』の初稿から第2稿にかけて登場人物の人物造形の修正をした話を前回書きました。今回は、その修正を受けてストーリーを修正した話です。

2025年4月3日に初稿をいただいた『六月の満月』。すぐに修正に取りかかってもらいたかったのですが、日刊ゲンダイで6月からスタートする長編小説『十二の眼』があったので、4月から5月上旬にかけては主にそちらに取りかかっていたら、『六月の満月』の第2稿をいただいたのは6月上旬でした。この時期からライオンさんが2作同時進行で書き進めていきます。

もちろんライオンさんは大変だったと思うのですが、結果としてこれが良かったね、という話をライオンさんとよくしています。『六月の満月』は書き下ろしで、（特に前半が）静かな物語、『十二の眼』は連載で、物語冒頭からトップスピードのエンターテインメント小説。相互に作用しあって、良い循環を生み出したのです。『六月の満月』には疾走感を、『十二の眼』には重厚感を、という感じです。

『六月の満月』の主人公の章吾と実日子は、決して派手な性格ではなく、他者と積極的に絡んでいく人間ではありません。そういう性格の二人だけに、下手をしたら物語前半が地味になる可能性があります。ここに良い作用を及ぼしたのが『十二の眼』。ただ、二人の関係を性急に近づけようとしたら、物語から品性のようなものが失われてしまいます。そこでライオンさんと話したのが、

- ・プロローグで描く場面を変える
- ・章吾と実日子が出会い、関係を深めていくのはゆっくりでいい。その代わりに、新しい登場人物を出して章吾とやり取りさせることで物語に「動き」を出す

などでした。他にも色々あるのですが、ネタバレにもなるので伏せます。ライオンさんはWordで原稿を書いている、1ページのレイアウトが40字×40行なので、

「この場面をもっと早めにした方が物語への興味が高まると思うので、ライオンさんのレイアウトで25ページあたりに来るようにできませんか？」

というようなやり取りを山ほどしました。人が人を思う気持ちの繊細さだったり、登場人物が発した台詞の強さや深さだったり、ライオンさんの小説の良いところだと僕は思っています。なので、「人と人を出会わせてください」「章吾が人とやり取りするシーンを増やしてください」といったお願いをたくさんしました。

5～6月のライオンさんとのやり取りをまとめるとこういう感じになるのですが、この時期は本当に毎日のように作品の話をしていました。ライオンさんはもちろん、僕も『六月の満月』（と『十二の眼』）にどっぷり浸かっていました。そして8月上旬、『六月の満月』の第3稿が届きます。

「めっちゃ面白いよライオンさん！」

と思わず電話するくらい、物語が輝きを発していました。

「章吾と実日子のことがだいぶ好きになりましたよ」

とライオンさん。

ライオンさんは、原稿を修正する際に大きな特徴があります。打ち合わせの通りに直すのではなく、何か一つアイデアを載せてくるのです。修正原稿を読みながら「こうきたかー！」と驚くことがざらにあります。編集者だろうがなんだろうが「読んだ人を驚かせたい、楽しませたい」という気持ちの表れだと思うのですが、ライオンさんがそういうモードになってくれたおかげで、『六月の満月』は表情豊かな物語になりました。大きな直しは終わりましたが、まだ完成ではありません。この原稿を踏まえて、第4稿以降で「矛盾の整理」と「さらに面白くするためのブラッシュアップ」をライオンさんはしてくれたのです。



『六月の満月』（一雫ライオン）ができるまで⑫ （2025年8月上旬～12月）

『六月の満月』の第3稿をいただいたのが2025年8月上旬。初稿の問題点は、登場人物たちの性格や言葉遣いを修正したことで明確に改善。むしろメリハリが効いて、素晴らしくなりました。そして、第3稿でライオンさんは物語に疾走感を出す修正を施しました。その段階ではまだ矛盾の全てを解消できたわけではなく、ライオンさんはそこに手を入れながら、物語にさらなる面白さを加えていく改稿をしてくれました。

こういう時のライオンさんは良い意味でしつこくて、僕が「いいと思いますよ」と生返事をするくらいだと納得してくれず、「面白いです!」とか「いいですねえ!」とか言わせたいと思っている節があります。「こういうのはどうですか?」「ここで章吾にこう言わせるのはどうですか?」と、実にたくさんの味付けをしてくれました。

細かいやり取りを重ねて、10月下旬。第6稿か第7稿になるでしょうか。ついにこの日が来ました。

「ライオンさん、本当にお疲れさまでした。この原稿をゲラにしましょう」

編集者は作家と原稿のやり取りをするのも大切な仕事ですが、その原稿を書籍に仕上げるという大きな仕事もあります。最初に原稿をいただいた4月から完成に至った10月までの半年間、と言いたいところですが、気持ち的には『二人の嘘』のあとにライオンさんにがんが見つかって闘病なさっていた2022年から2025年10月までが「『六月の満月』の原稿をやり取りした日々」という感じがしています。

なので、「ゲラにしましょう」とライオンさんに言った時は、何とも言えない気持ちになりました。「流星舎の刊行作品第一弾はライオンさんの小説にしたい」と言って、あれこれありながらも作り上げた『六月の満月』。当たり前ですが、僕にとっても思い入れの深い作品です。その作品をついに入稿するというのは、実に感慨深いことでした。もちろん、やることは山積み。

- ・ 何文字×何行で1ページをレイアウトするか＝何ページの本に仕上げるか
- ・ ハードカバーとソフトカバーのどちらにするか
- ・ 本文の書体をどうするか
- ・ 本文のデザインをどうするか
- ・ 装丁をどうするか

ざっと思いつくだけでもこのあたりのことを考えなきゃいけないのですが、流星舎として初めての書籍なので、

- ・ 印刷所をどうするか
- ・ 校正をどうするか

ということも決めなくてははいけません。そして、流星舎は僕ひとりなので、

・書店への営業をどうするか

も大きな課題でした。僕は編集者でありつつ、営業でもあり、そして経理担当でもあります。ぼんやり恐怖に震えていると底なし沼に落ちるので、やるべきことを紙に書いて、一つずつやっていくことにしました。書いて可視化することで恐怖の正体をはっきりさせるいいですか。「自分はこれをやらなきゃいけない」と頭に叩き込むといいですか。

「やるべきこと」の中で一番心を砕いたのは、やはりデザイン面です。ライオンさんは「僕はよく本屋でジャケ買いしていた」とおっしゃるのですが、そんな方の作品を書籍にする以上、やっぱり「ジャケ買い」してもらえるような本にしたい。そこでライオンさんと相談です。ですが、ほとんど秒で決まりました。

『二人の嘘』の装丁をしてくださった鈴木成一さんにお会いしましょう」

ライオンさんも僕も同じことを考えていたのです。そして鈴木成一さんに依頼。メールを見返してみると、12月初旬に鈴木成一さんにメールをしています。流星舎として初めての装丁依頼です。なんとなく緊張しながらメールしたのですが、鈴木成一さんは即答で「承りました」と返信をくださいました。そして12月18日に打ち合わせすることに。

「原稿のやり取り」という日々を経て、ついに『六月の満月』は「書籍として仕上げていく」という段階に移行したのです。今まで何冊も本を作ってきたので何度も経験してきたことでしたが、「相談できる人が隣にいない」という状況ゆえ、「どっちにしようかな」と迷った時の判断には結構時間がかかってしまったように思います。編集者としては褒められたものではないかもしれませんが、編集者が考えるべきことを「ライオンさんどう思います？」と相談していたのは、今となっては「ライオンさん、迷惑だっただろうなあ」と反省。



『六月の満月』（一雫ライオン）ができるまで⑬ (2025年末～2026年2月)

『六月の満月』の原稿は印刷所に入稿した、ゲラにもなった、デザインの打ち合わせもした。

結構ちゃんと進められている感じがします。そうこうしているうちに2026年になりました。

そして、2026年に入ってから記憶が曖昧なくらい忙しくなりました。今までの仕事人生を振り返ると「あの時期はハードだったな」と思う期間がいくつかありますが、2025年末からの日々もおそらく将来振り返ったらそうなるだろうと思います。なかなか楽しい日々でした。

これは『六月の満月』とは別のことなのですが、ゲッターズ飯田さんの書籍の編集もやっている関係で全国あちこちで開催されるトークイベントに行き、2027年版の編集もぼちぼち始まり、さらにはラッパ一般若さんの書籍『般若、井戸を掘る』の編集も佳境を迎えていました。それ以外にも進行している企画もあり、その他にも会社として初めての決算があったり、とにかくあれこれ押し寄せました。

そんな中で、ライオンさんと相談して『六月の満月』のプルーフを作ることにしました。正確には「校正刷り」と言うようですが、書評家や書店員の方に読んでもらうための簡易製本みたいなものです。昔はゲラで読んでいただくことが多かった記憶がありますが、近年はプルーフが圧倒的に多いと思います。

幻冬舎時代にもプルーフ作成をしたことはもちろんありました。作業としては、

- 1:ネームを作成して著者に見せる→入稿する
- 2:ゲラを確認して、修正があれば赤字を入れて戻す
- 3:出来上がったプルーフを編集と営業で各所にお送りする

という感じ。幻冬舎時代との大きな違いは3でした。書評家やメディアに送るのは経験がありましたが、書店員の方にプルーフを送ったことはなかったのも、「『六月の満月』を書店員の皆さんにどうやって読んでいただくか」が課題だったのです。幻冬舎時代はこれは営業局の方達がやってくれたので、僕は「どれくらい応募があったか」と教えてもらうだけでした。でも、流星舎は僕ひとり。僕がやらないと何も前に進みません。

「さて、どうしよう」。流星舎を立ち上げてからの日々を一番シンプルに表現すると、これに尽きるような気がします。「どうしよう」ってなって、「どうにかする」というか。もちろん、色々な人に助けていただきましたし、今回も詳しくそんな人に教えてもらいました。プルーフに同封する注文書も人の助けを借りながら作成。友達がPowerPointで叩き台フォーマットを作ってくれたとき、「え？パワポ使えるの？」と驚きつつも感謝したり。よく知る誰かの知らなかった一面を知ることができたのは、多忙な日々の中でも心躍る瞬間でした。「助けて」って言うと（何気に苦手）人って助けてくれるもんだなあ、という気づきを得たのも大きかった。

最終的に「Googleフォームで募集しよう」となったのですが、僕は基本的にこの手の作業が不得意です。不得意というか、「聞いたことはあるけど……」レベルでよくわかりません。それでもなんとかかなりました（それほど難しい作業じゃなかったのも、得意気に語るほどではないのですが）。募集を始めた途端になぜかサイトにアクセスできなくなった時は、「なにこれ？笑えない」とさすがに焦りましたが。

「さて、どうしよう」も1つ2つなら刺激と捉えることもできますが、いくつもそれが重なると正直嫌になります。1つの作業にかかる時間も膨大で、「あー、もう！」と言ってばかりだったと思います。それでも頑張れたのは、この思いが消えることがなかったからです。

『六月の満月』を多くの人に読んでいただきたい。

この思いがあれば多くの困難はなんとかなるものだと思います。むしろ、編集者からこの思いが消えたらやってられないかもな、とも。特殊技術を駆使する仕事ではありませんが、相手は人間ですし、しかも作家は繊細ですし、嘘やごまかしは見破られます。情熱の有無、あるいは多寡によって、面白くもつまらなくもなるのが編集者という仕事かもなと思っています。

僕は、一雫ライオン作品の読者が増えれば日本が良くなると思っています。不器用な優しさ、泣けるやせ我慢、日陰への温かい眼差し。彼の人生観が凝縮されたような物語を読むと、「いいもん読んだなあ」と思えるのです。行間に人間くささが溢れていて、しかも決して小難しい物語ではなく、読後に少しだけ優しくなれる物語。そう思っているので、「『六月の満月』を多くの人に読んでいただきたい」という思いが消えることはありませんでした。

そして、『六月の満月』プルーフ募集にご応募があった時の感動と言ったら。小さな一歩かもしれませんが、ライオンさんと僕にとっては忘れられない一歩でもありました。ご応募くださった皆様、本当にありがとうございます。こういう感動はまぎれもなく前進エネルギーになりました。

『六月の満月』（一雫ライオン）ができるまで⑭ (2026年2月上旬)

ぐわーーーーっ！
なにこれ、カッコよーーーー！
めっちゃ好き！

2月上旬、僕がライオンさんに送ったメールです。何かというと、『六月の満月』のデザインラフ。今作のデザインをお願いしたのは鈴木成一さんと宮本亜由美さんでしたが、2月上旬のある日、『六月の満月』のデザインラフが届いたのです。メールを開いた瞬間、どわーってなってライオンさんに連絡。確かライオンさんは家にいなくて、少ししたら戻るから連絡する、みたいな感じだったと記憶しています。

そしてライオンさんから電話。ライオンさんも興奮していました。第一声からもう興奮していました。「『二人の嘘』も好きだけど、『六月の満月』のデザインもすごい好き！」と。

というわけで、前置きが長くなりましたが、今回は「書籍デザイン」のお話。

どんな本を作る時も、カバーデザインと帯コピーはいつも悩みます。「デザインは編集者がやるものではない」という意見もあるかと思いますが、打ち合わせの時に「自分はどうしたいと思っているか」を伝えるのは大事だと思うので、やっぱり悩みます。『六月の満月』のデザイン打ち合わせを鈴木成一さんと宮本亜由美さんにしたのは2025年12月18日。『二人の嘘』の時もデザインをお願いした二人なので、ライオンさんをイチから説明する必要はないながらも、今作にかけた思いは並々ならぬものがあったので、僕も必死にプレゼンしました。

「とにかく読んでみるよ」

とのことでその場はお開き。そして2026年1月中旬に写真やイラストなどの「方向性の候補」を提案していただきました。その中で目を引かれたのが、最終的に『六月の満月』の装画をお願いすることになったagoeraさんの絵だったのです。温かさがあって郷愁をそそられる雰囲気、『六月の満月』と通底しているように思えて、ライオンさんに相談したところ、彼も「ぜひ」とのことでした。

agoeraさんにお仕事をご依頼した際にも、メールでこの作品にかける思いを書かせていただきました。暑苦しいとは思ったのですが、『六月の満月』に必要なのは「熱の伝播」のような気がしていたからです。ライオンさんが作品に込めた熱を、僕がそのまま次の方に渡すイメージ。100を100のままというか、1滴もこぼさないというか。ここで僕がかっこつけて作品の熱を冷ましてしまうのは違うと思ったので、とにかく「熱をそのまま」の意識でこの時期は過ごしていました。ライオンさんの作品は、上品さの中にもうまく言えないのですが野蛮さみたいなものがあるので、上手に説明するのではなく、とにかくやばい！みたいな感じで伝えるようにしていました。

その後ラフをいただき（この時点でめちゃくちゃカッコよかった）、そして2月上旬にデザインラフが届き、冒頭の興奮につながるというわけです。この記事を書くにあたってメールを見返しましたが、初めて見た時の興奮まで蘇ってきました。

最後に、帯コピーに関して少しだけ。前回書かせていただいた「プルーフ」をお送りし始めたのが1月初旬だったのですが、1月中旬くらいから書店員の方達からご感想をいただくようになり、それがめちゃくちゃ熱い＆素晴らしいものだったのです。切なさや温かさを内包した『六月の満月』の魅力を見事に捉えてくださっていたし、エンターテインメント小説として面白いと思ってくださったことが伝わってきました。とても嬉しかったです。

「このコメントを帯に載せたい！」と思って各所に依頼の連絡をし始めたのが1月末。そうするとあらすじを帯に載せるスペースがないよなあ、ということで、「あらすじは文庫みたいにバーコード横に載せちゃおう」と考えて、カバー裏面に配置してもらったのでした。なので『六月の満月』は裏面が文字でびっしりです。でも、この作品に込めた前のめりの情熱って感じがして、ひそかに気に入っています。素敵なコメントをくださった書店員の皆様、ありがとうございました！

『六月の満月』を読んでもらった
書店員さんのご感想
を紹介します
※連載した感想の一部・抜粋です。

- 人は何歳だってやり直すことができるという確かな希望を感じました。（紀伊國屋書店福岡本店 宗岡敦子さん）
- ページをめくらずにはいられないスリリングなサスペンスであり、あまりにも不器用なやさしさが読み手の胸を打つミステリーであり、重い罪を背負い、大きな罪を受け、それでもお寄り添い続ける愛情の物語。長編2~3作級の成分が濃縮されたように思えたほど。（ときわ書店 宇田川拓也さん）
- 多少のモヤモヤが残った最終章だからこそ、ずっと想像していたくなるし誰かと感想を話し合いたくなる。私も大好きな作品の一つになりました。（紀伊國屋書店梅田本店 百々典孝さん）
- もう、愛だの恋だのどうでもいいかと思っていたが、想定外に良かった。（未来屋書店上磯店 横山茂さん）
- 不器用ながらも懸命に前へ進もうとする登場人物たちが愛おしく切なかったです。章吾や実日子、瑠人には幸せになってほしいと思いながら読みました。（岩瀬書店会津若松駅前店 北見美恵子さん）

- 「ものすごく……とても……最高に……良い小説を……読んでしまった……切ない……良い……本当に良い……」読者がどこかいくほどこを離れたい小説。（未来屋書店碑文谷店 福原夏菜美さん）
- 後半になるにつれどうなっていくの気になり読むスピードが上がりました。（紀伊國屋書店ゆめタウン博多店 富田智佳子さん）
- 心情の機微を描かせたら定評のある一雫ライオン。間違いない面白く、泣けます。（TSUTAYA BOOKSTORE そよら成田ニュータウン 真田恵一さん）
- 幸せを掴もうとする過程が濃厚で、何よりエンタメとして上質なのが素敵です。（紀伊國屋書店西武東戸塚S.O.店 鶴見祐空さん）
- ページをめくった瞬間から、指先にジンと伝わる、寂しき、優しき、辛き、温かき、こんな心動かされるのに、上手く言えないのもどかしい。とにかく、読んでほしい。心が揺れるのを感じてほしい。（紀伊國屋書店天王寺ミオ店 西澤しおりさん）
- 「どうせ毎日絶えてしまう」という言葉が、初めは優しく、徐々に不穏に響き、ラストでは悲しくも温かな確信に満ちたものに変わっていく。なんてすごい台詞なんだろうと思った。（くまざわ書店西新井店 塩里依子さん）

- 必死に闘いながら生きる章吾と実日子の幸せを、最後まで願わずにはいられませんでした。（紀伊國屋書店愛知産業大学ブックセンター 柴田真奈美さん）
- 暗い中にも明るい兆しが見え、読後は救われた気持ちになりました。（ジュンク堂書店近鉄あべのハルカス店 浦田麻理さん）
- ハラハラドキドキが止まらない疾走感。恋愛小説は人生に必要なのだ。（うさぎや矢板店 山田恵理子さん）
- 物語の緩急のバランスが絶妙で、文字通り目が離せなくなつた。泣きすぎてしんどいです。（福岡金文堂志摩店 伊賀理江子さん）
- ようやく見つけた三人の温かな場所に安堵しつつも終始興奮がおさまらない。どうか後戻りだけはしないでほしいと願いながら物語を追いました。（未来屋書店大日店 石坂華月さん）
- 物語として切なさすぎる。しかし嘘っぽくない人間そのものが書かれていて感動した。（ジュンク堂書店滋賀草津店 山中真理さん）
- 切なすぎました……。心が綺麗な人はみんな、いつか幸せになってほしい。（BUNKITSU TOKYO 成生隆倫さん）

- たくさんの人にこの本を読んでほしい。これはただの恋愛小説ではないと私は思うから。（未来屋書店古川店 千葉恵美さん）
- 暗い中にも明るい兆しが見え、読後は救われた気持ちになりました。（ジュンク堂書店近鉄あべのハルカス店 浦田麻理さん）
- 必死に闘いながら生きる章吾と実日子の幸せを、最後まで願わずにはいられませんでした。（紀伊國屋書店愛知産業大学ブックセンター 柴田真奈美さん）
- セリフの疾走感が心地よく、物語に一気に引き込まれます。（伊勢治書店ダイナシティ店 有坂務さん）



『六月の満月』（一雫ライオン）ができるまで⑮ (2026年1月中旬～3月)

今回は「プルーフを送った後、何が起きるか」という話です。

前も書いたように前職時代は、

- 1:ネームを作成して著者に見せる→入稿する
- 2:ゲラを確認して、修正があれば赤字を入れて戻す
- 3:出来上がったプルーフを編集と営業で各所にお送りする

この3の領域で「書店員の方に送る」というのは営業局の方達にやってもらっていました。でも、『六月の満月』では、それを自分でやらないといけない。プルーフはGoogleフォームから応募してもらう形にしたのですが、初めてご応募をいただいた時は「やった!」と小躍りしました。とにかく嬉しい。応募がない日はなんか気持ちが沈むし、一件でも応募があれば嬉しくなってライオンさんに電話したくなる。この仕事を20数年やっていた人間の感慨ではないかもしれませんが、一喜一憂の日々でした。泰然自若とは程遠い自分がいて、そんな自分が新鮮。ご応募をいただけたことをライオンさんが喜んでるのが伝わってきて、それも嬉しい。

そして数日経って、読んでくださった書店員の方から感想が届きました。応募フォームには注文希望数の欄も作っていたのですが、そこに数字が記入されている。ご注文をダイレクトにいただくと、作る側の人間としては、めちゃくちゃ嬉しい。感謝の気持ちとか、お礼状書こうかなとか、とにかく心が騒がしい。

つまり、「プルーフを送った後、何が起きるか」というと、「心が動く」のです。

前職時代だってもちろん心は動いていたのですが、なんというか、もっと生々しく動く。ライオンさんとは笑ったり言い合いをしたり濃い日々をご一緒していたので、「担当編集者として嬉しい」というよりも、なんというか「アニキ、やったぜ」みたいに兄弟を祝福する感覚。一方で、応募がないことを想像するだけでなんか怖い。希望と恐怖のジェットコースターみたいな感じ。いただいた感想なんて、何回読んだかわからないくらい読みましたし、「こんな感想をいただきました」とライオンさんに電話しまくっていました。

『六月の満月』はライオンさんと二人で作りに上げた小説だったので、僕ら以外の方から感想をいただくのは初めてでした。だから、「面白かった」と言われると、めちゃくちゃ嬉しい。

これは流星舎としての刊行第二弾『般若、井戸を掘る』でも同じでした。こちらはプルーフを作成したわけではないのですが、ゲラを読んでくださった方から感想をいただくと、すごく嬉しい。一方で、「面白くなかったのかな」と思うようなことがあると、とても悲しい。

20数年も同じ仕事をしていると、どうしても「慣れ」が生じます。でも流星舎としての日々がスタートしてからは多くのことが「不慣れ」だったので、心の弾力が戻ったような感覚がありました。それもこれもすべて、書店員の方たちからいただいた感想のおかげ。言葉の力に改めて気付かされた日々でした。

その「言葉の力」は『六月の満月』にも宿っています。「この台詞がよかった」「この一文が響いた」などの感想を読んでいると、「ライオンさん、頑張ってたなあ」なんてしみじみ思ったりするのです。

本を作るって、やっぱり面白い。人とも出会えるし、心が動くし。



『六月の満月』のブルーフ

『六月の満月』（一雫ライオン）ができるまで⑬ （2026年3月）

『六月の満月』ができるまで」は当初3～4回くらいで終わる予定でした。

3～4回では全然終わらなかったのですが、この回を最終回にしようかなと思います。『六月の満月』が「できてから」も語るに足る物語があるにはあるのですが、それは書く機会があったら書こうかな、と。

前回、ブルーフを作った時のことを書きました。そして、その最後に「本を作るって、やっぱり面白い。人とも出会えるし、心が動くし。」と書きました。『六月の満月』を作ることで僕が得たものって、これに尽きる気がします。出会いと感動（怒りに駆られたり落ち込んだりしたことたくさんあったけど笑）。

ブルーフをお送りした後、読んでくださった書店員の方から感想が届きました。それが嬉しくて、お礼のメールを送っていたのですが（あの時期はずっとメールと手紙を書いていた気がします）、ある方から熱い返信をもらって、それが嬉しくてまた返信をしていたら、その方がライオンさんを「推し作家」に選んでくださいました。その後もやり取りが続き、未来屋書店さんの公式YouTube「推しえて作家さん！！」にライオンさんが登場する流れになりました。ライオンさんがインタビューを受けたのは、その書店員の方がいらっしゃる未来屋書店古川店さんです。



別の書店員の方には、2月末くらいにメールをお送りしました。そうしたら、熱い長文の感想をくださって（ライオンさんと一緒に「あんま気にいってもらえなかったんですかね」と話していただけに、この感想はすごい嬉しかった）、しかもそのメールの最後に「というわけで」というさりげない言葉が添えてあり……。何の気なしに読み進めた僕は、おののきました。とんでもないご注文冊数が書かれていたからです。嬉しすぎてライオンさんにすぐ電話。ライオンさんは電話口でその書店員の方の名前を叫んでいました。ちなみに、その書店さんはこの『六月の満月』ができるまで」をA4に出力してお店で掲出してくださっています。紀伊國屋書店梅田本店さんです。5月中旬に大阪出張があって、その際にちょっとお店に寄ったらまだ入り口のところでドドン！と展開してくださっていて、驚くやら感動するやら。嬉しくて、やる気がみなぎりました。



このお二方だけではありません。『六月の満月』は、語れば尽きないほど多くの書店員の方達に支えていただき、読者の皆さんに読んでいただきました。この場を借りて、改めて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

発売から2ヶ月弱、ついに先日重版をかけることができました。ライオンさんにそのご連絡をしたら、一つお願いがある、と言われました。「書店員の方たちにお礼の言葉を届けたい」というのが彼の願いでした。



流星舎通信

『六月の満月』(一雫ライオン) 重版決定しました！

一雫ライオン



撮影：朝岡吾郎

『六月の満月』重ね重ね、お世話になっております。書店員の皆様に、こんなに嬉しいご報告ができること、ほんとうに感謝しております。発売から一か月半が過ぎ、このたび『六月の満月』が重版となりました！！ほんとうにありがとうございます。みなさまのおかげです。年甲斐もなく「！」をつけてしまいました。出版社を立ち上げた流星舎代表の有馬、そしてオールドルーキーともいえるわたしの、ひとつの大きな目標でした。おそらく有馬も、そしてわたしも、今まで経験した「重版」の重みの、何十倍、何百倍の喜びと感謝を感じています。それは紛れもなく、出版前から、そして出版後も、多くの書店員の皆様と、体温のあるやり取りをさせていただいたからです。読者の方々の感想を見るたび、「書店員の方がつないでくださり、渡してくださっているのだな」と感じています。稚拙な言葉ですが、まだまだがんばります。これからも『六月の満月』を、なにとぞよろしく願いたします。(一雫ライオン)

「読者」や「書店員」には、当たり前ですがそれぞれの人生があり、それぞれに事情があり、それぞれの好きな本があります。ライオンさんと僕がやりたかったのは、そういう方たちと直接触れ合うことでした。作品を気に入っていただけなかったら仕方ない。でも、せめてその体温は感じたい。だから、可能な限り書店を回りたいと思っていました。

そのためにも僕らは『六月の満月』を作らないといけませんでした。ライオンさんが作家で、僕が編集者である以上、「読者」や「書店員」と触れ合うためには作品を作らないといけないからです。『六月の満月』の見本ができた時、それはもちろん嬉しかったのですが（何と言っても創立記念作品です）、ライオンさんと何となく「ここからですね」みたいな話をしたことを覚えています。ついに僕らが体を動かす時が来た、と。ライオンさんの体調の問題もあるし、僕も僕でへばり気味ではあったけど、書店とアポが取れた時は素直に嬉しかった（最初に書店に電話した時は緊張して自分でも何を喋っているかわからないくらいだったけど）。「本当に来てくれるんですか？」とおっしゃった方もいたけど、僕らはどこへでも行くつもりでした。今でもそうです。僕らはどこへでも行くつもりです。動き回った果てに、人と出会って、その出会いが新たな面白いことを生んでくれたらいいな、って思っています。

本を作るって、やっぱり面白い。人とも出会えるし、心が動くし。